論　説

「農業梯子」論についての最近の議論をめぐって

松　永　健　二

Ⅰ．はじめに

「独立革命の時期以来，アメリカ国民は，自分達の未来について落ち着いて自信を持っていた。」「ヨーロッパ人が，かつて在ったものを崇拝しているのと同じ精神で，合衆国は未来を賞賛した。」「アレクシス・ド・トクヴィルにとって，合衆国ほど『自信を持って未来を掴む』国家は世界になかった。」[1)]

これは，1960年代半ばに，F・J・ターナー Frederick Jackson Turner の歴史理論の後継者のなかの第一人者R・A・ビリントン Ray Allen Billington が，ターナーの「フロンティア仮説」についてその当時の歴史学と社会科学の研究の到達点にたって再評価を試みた書物『フロンティアの遺産』の一節である。そして，さらに彼は「今日の合衆国の国民が，すべての産業化した国家の中で，社会的移動の割合を比較できる場合には，自分達の国はまれなほどの機会がある国であるという信念に，まだしがみついていることを示している。これが『アメリカの夢』の基本的構造であって，国民のかなり多くの部分に動機づけをする推進力の実質をなすものである。この信念が永続していることは，社会に対して強力な衝撃を与えてきたし，現在でも与えている。」[2)] と述べている。

ところで，言うまでもなくここでの「今日」や「現在」は，J．F．ケネディが「ニュー・フロンティア」というキャッチフレーズを使用してからわずか数年後の1960年代半ばの時代であり，「社会的移動 social mobility」あるいは「垂直の移動 vertical mobility」，つまり階級から階級への上昇が合衆国ほど容易な国はほかにはないという「信念」はこの時期にはまだ「永続」しており，「社会に対して強力な衝撃」を与えていると考えられていたのである。

高知論叢（社会科学）第48号　1993年11月

この「社会的移動」に対する「信念」に一つの根拠を与えたものは，西部フロンティアにおいては，はじめ土地を持たない移民たちが自らの労働によって自作農に上昇していくという「事実」と「思い」であり，それが農業史家たちによって理論的に整理されたものが，ほかならぬ「農業梯子」仮説 the Hypothesis of the Agricultural Ladder であった。要するに「農業梯子」仮説とは，農業における社会的経済的移動 social and economic mobility について叙述するために，農業に従事する者の階層的な状態を，一番下の段に農業労働者，中ほどの段にいろいろな段階と程度の借地農（後に述べるようにこの段階をどのようにとらえるかによって梯子の段が変わってくるのだが），そして，一番上の段に自作農，という梯子の段になぞらえたものである。後に述べるように，アメリカの学界でこの「農業梯子」論がはっきりとした形であらわれてくるのは1910年代末のことであった[3]。

ビリントンからさらに約20年経って，「農業梯子」論についての研究がアタック Jeremy Attack によって発表された[4]。この1980年代後半には，アメリカは世界最大の債務国になりアメリカ国民がかつて持っていたといわれる「未来に対する自信」や「楽天主義」を喪失し，大きく揺らいでいた[5]。本論文では，このアタックの問題提起を一つの手がかりにして，「農業梯子」仮説がアメリカ史理解に持った意味について検討しようと思う。

1） Billington, Ray Allen, *America's Frontier Heritage*, 1966 / 渡辺真治訳『フロンティアの遺産』研究社，1971年，235～236ページ。

2） 同上，136ページ。

3） Barlowe, Raleigh & J.F.Timmons, "What has Happened to the Agricultural Ladder?" *Journal of Farm Economics*, vol.32,no.1, Feb.1950, p.31.
なお，大内力は，「農業梯子」論を最初に論じたのは「スピルマンであったといわれている」としている（大内力『アメリカ農業論』東京大学出版会，1965年，p.35）。

4） Atack, Jeremy, "The Aguricultural Ladder Revisited : A New Look at an Old Question with Some Data for 1860", *Agricultural History*, vol.63, no.1, Winter 1989.
ジェレミー・アタックは，イリノイ大学の経済学教授で，この論文の大部分はハーバード大学経済学客員教授の間にかかれたものである。この材料のいくつかは，もともと1986年にニュー・オリーンズで，また1987年にソ連エストニアの↗

Ⅱ.「農業梯子」論をめぐる論争

「農業梯子」論に対するアタックの見解について述べる前に，「農業梯子」論をめぐって行われてきた論争について，主にアタックの整理に依拠してあらかじめ検討しておくことにしよう。

論争の流れを概括すれば，先にも述べたように「農業梯子」論は1910年代末に，それ以前の何世代にもわたるアメリカ国民の「信念」をその歴史的背景にしつつ学界で成立したのだが，1930，40年代にこの「上昇移動」に対する批判が展開された。そしてさらに，1950年代以降「上昇移動」批判に対する反批判が展開され，伝統的な「農業梯子」論が復活したと言ってよい。

アタックに言わせれば，そこでの論争の焦点は借地農と自作農との間の移動であった。つまり，借地農は農業労働者たちが自作農としての独立の地位に上昇移動するその途中だったのか，あるいは彼らは自作農が困難な時期に落ちぶれて土地なし賃金労働者に滑り落ちたものなのか。

長い間，前者の解釈が受け入れられてきた。アタックは，この時期の議論のあり方の一つの例として「1890年センサス」についてのセンサス局長官の次のような報告を引用しながら，このことは「証明する必要のない当然の事実であ

↘タリンで開催された「農業史の数量化に関する米ソ二国間会議」で発表された，借地農業を扱ったもっと長期的視野にたった論文の一部であった。もっぱら借地農業の問題を扱ったこのより長期的な研究の他の部分は，Atack, Jeremy, "Tenants and Yeomen in the Nineteenth Century", *Agricultural History*, vol.62, no.3, Summer 1988 にある。

5）この時期のアメリカ人の「アメリカという国」に対する自己認識のありようについては，スタッズ・ターケルが「アメリカン・ドリーム」についてどう思うかを100人のアメリカ人にインタビューし編集した，Turkel, Studs, *American Dream : Lost and Found*, 1980 / 中山容ほか訳『アメリカン・ドリーム』白水社，1990年，を参照されたい。同じ時期のレーガン登場を支えた経済的状況と心理については，Yeager, Robert C., *Losing It－The Economic Fall of the Middle Class*, 1980 / 丸山勝，長谷川重四郎訳『ルージング・イット ── アメリカ中流階級の没落』新評論，1981年，をあわせて参照のこと。

る」とされていた，と述べている。「借地農の数は，土地所有者（自作農）の数を犠牲にして増大している……しかし，自作農 owners による耕作農地は，1850年以来農業人口の増大よりも早いテンポで増大してきた。このような増大は，以前には賃金労働者 wage employees であった者が借地農 farm tenants の地位に上昇することによって借地農の数の増大があった，と考える場合にはじめて可能である。このような借地農業者の増大は，賃金労働者からの補充によって起こったのであって，自作農 farm owners あるいはその子どもから補充されているわけではない。」[6)]

さらにアタックは，1920年の借地農に関するセンサス・モノグラフのなかでキャロル・ドーテン Carroll Doten が，次のように書いていることを引用している。「一般的にいって，借地は土地所有への近道であるということが疑問の余地なく証明されているように思われる。実際，借地は，農業梯子の一部である」[7)]，と。

このいずれの場合をみても，「証明する必要のない」とか「疑問の余地なく」という表現に示されているように，初期の「農業梯子」論は庶民の「夢」として考えられてきたことに学問的な装いを凝らしたものという要素がきわめて強かったことを窺い知ることができよう。

1921年恐慌とともに始まり，第2次世界大戦の勃発で終わる〈農業危機 farm crisis〉，とりわけ1920年代と30年代の〈農業不況 agricultural distress〉に直面して，「農業梯子」を上っていくという楽観的な見解の再検討の必要に迫られ，1930年代と40年代になって「上昇移動」という通説に対する批判がゲイツ Paul W. Gates らによって展開された。

アタックによれば，この農業危機において「年平均96,000の農場が抵当流れになり，ピークの1933年には20万の農民が農場を失い，土地から追い出される

6）U.S. Census Office, *Twelfth Census, Agriculture, Part 1* (Washington, DC.: GPO, 1902), lxxvii, quoted in Atack, *op.cit.*, p.3.

7）Goldennweisser, E.A. and Truesdell, Leon E., *Farm Tenancy in the United States* (Washington, DC.: GPO, 1924), p.10, quoted in Atack, *op.cit.*, p.3.

か，借地に戻った」という「劇的なできごとは，政治家も学者をも同様に虜にした。陳腐な文句はもはや目的にかなわないように思われた。スケープゴートがみつけられねばならず，19世紀の連邦政府の公有地政策が，ゲイツにしたがえば，個人の土地所有に制限をもうけなかったために，『安いかただの土地 cheap or free land の早い時期の消滅と借地の出現』に導いたその犯人とされた」[8] のだという。アタックは，ゲイツが19世紀の借地農は「農業梯子」を降りる途中の自作農であったと主張したという。

確かに，アタックが言うように，抵当債務の問題は多くの自作農を借地農の階層に下降させがちであったし，当時の政策担当者の多くもきわめて「悲観的な」見解を表明した。たとえば，1936年の合衆国の農務省の農場保有態様に関するある研究は「農民たちは次第に土地の所有権を失いつつある」と述べているし，1937年の借地農業に関する大統領特別委員会 Presidential committee on farm tenancy は，「(農業梯子の) 階段の移動は，上昇よりも下降の方が優勢であった」し，「農業梯子における増大しつつある借地農業は，かんぬき――すなわち，そこから逃げ出すことがますます困難になる固定的な社会的地位に監禁を強制される――になった」と述べている[9]。

しかしながら，アタックのゲイツの見解に対する評価（つまりゲイツは「下降移動」を主張したという）は，19世紀のアメリカ農業史に対するゲイツの主張のきわめて単純化された矮小化である。この問題については，またのちに述べることにする。

ともあれ，1930年代，40年代の「農業梯子」論批判を経て，1950年代にアタックに言わせれば伝統的な農業梯子理論が〈復活〉するのである。それは，ラデュック Thomas LeDuc，カーティ Merle Curti たちによって始められ，ボウグ夫妻 Margaret B. Bogue and Allan G. Bogue とその教え子たちの研究によってその頂点に達した[10]。

8）Atack, *op.cit.*, pp.3-4.

9）*Ibid.*, p.4.

Ⅲ．借地農比率とライフサイクル

先に述べたようにボウグ夫妻やその教え子たちの研究によってその頂点に達することになる，農民の上昇移動を支持する伝統的な「農業梯子」論が1950年代以降復活したのだが，アタックのこの研究は「この伝統の中」にあり，この研究の課題は「南北戦争前夜の北部の問題を再検討し，安定性あるいは上昇移動性の理論と両立しうる新しい数量的証拠を示すこと」[11] であった。

「上昇移動」論であれ，それに対する批判であれ，これまでの「農業梯子」論に関わる研究は，相対的に狭い地域，その多くの場合は典型的な２，３の郡あるいは州にその分析が限定されていたり，梯子の一つの階段にすぎない借地の事情にのみ焦点がしぼられがちであったことなど，を批判した上で，アタックは「この論文は，1859～60年の合衆国の北半分の経験を示すデータを見ることによって，また賃金労働者から自作農までの間の梯子のさまざまな階段の，静的ではあるが共通項でくくられたモデルを見いだすことによって，より広い地理的，社会的概観を求めようとしている」[12] のだという。

この研究が依拠しているデータは，ベイトマン Fred Bateman とファウスト James D. Foust によって1860年センサスの原表から選択された21,118戸の

10） LeDuc, Thomas, "The Disposal of the Public Domain on the Trans-Mississippi Plains: Some Opportunities for Investigation", *Agricultural History*. vol.24 (October 1950). Curti, Merle, *The Making of An American Community : A Case Study of Democracy in a Frontier County* (Stanford 1959). Saloutos, Theodore, "Land Policy and its Relation to Agricultural Production and Distribution, 1862 to 1933", *Journal of Economic History*, vol.22 (December 1962). Bogue, Margaret B., *Patterns from the Sod : Land Use and Tenure in the Grand Prairie, 1850-1900* (Springfield 1959), Bogue, Allan G., *From Prairie to Corn Belt : Farming on the Illinois and Iowa Prairies in the Nineteenth Century* (Chicago 1963).

11） Atack, *op.cit.*, p.2.

12） *Ibid.*, p.5.

農村家族の標本である。これらの家族は，北東はヴァーモントから南東はメリーランドまで，西はカンザスやミネソタまでの北部16州のすべての非都市的な郡やタウンシップから無作為に選択された102の農村タウンシップに居住していた。

「農業梯子」論の場合問題にされる「梯子」の数についてであるが，スチュアート Charles Stewart は，農場労働者 farm laborers，借地農 operating leased land，自作農 ownership of one or more farms の3段であり[13]，逆にグレイ Louis C. Gray は，一方の極端で，梯子は少なくとも7段――すなわち，農業賃金労働者 farm wage laborers，クロッパー croppers，借地農 tenants，抵当債務を負っている自小作農 part-owners,mortgaged，抵当債務のない自小作農 part-owners, free of mortgage，抵当債務を負っている自作農 owner farmers, mortgaged，抵当債務のない自作農 owner farmers, free of mortgage――あったと考えていた。

これに対して，アタックの分類は，その使用した資料の制約（つまり抵当債務の有無がわからない）から次の4段，すなわち，賃金労働者 wage laborers，借地農 tenants，自小作農 part-owners，自作農 owners であった[14]。

言うまでもなく抵当債務の問題はこの「農業梯子」を論ずる際に欠かすことのできないきわめて重要な問題であるが，資料上の制約があるとは言え抵当債務の問題を検討せずに一定の結論を出しているのは，この研究の致命的欠陥の一つである。

ベイトマンとファウストによって提供された標本には11,943の農場があり，そのうち10,288は改良地や未改良地の面積や穀物生産高や農場，農具，家畜の価値のような主要な数値が報告されており，また家族の中の少なくとも一人は

13）Stewart, Charles L., "Land Tenure in the United States with Special Reference to Illinois", *University of Illinois Studies in the Social Sciences 5* (September 1916) pp.10-11. なおイリノイ州の19世紀後半の借地農業の状況については，拙稿「19世紀後半イリノイにおけるテナント・ファーミングの展開と鉄道供与地」『高知論叢』第26号，1986年7月を参照されたい。

14）Atack, *op.cit.*, pp.5-6.

職業を農民 farmer，借地農 tenant，農業経営者 agriculturalist あるいは兼業農家 part-time farmer と報告されている家族であった。アタックはこれらのデータを農業統計や人口統計のデータと連結するなどして，これらの農業従事者を先にあげた農場労働者，借地農，自小作農，自作農の4つに分類した。このような作業をおこなう際にこれまでも常に問題にされてきた「農場なし農民 farmers without farms」については，1人前の農民であるが標本の調査の地域外で農場を経営していたものやあるいは農民の息子で結婚か何かで別所帯をもったものもいただろうが，「10中8，9カーティやボウグが言うあまりに楽観的な労働者であった」といいつつ，「これらの曖昧性の故に，『農場なし農民』を分析の対象から除外し」ている。

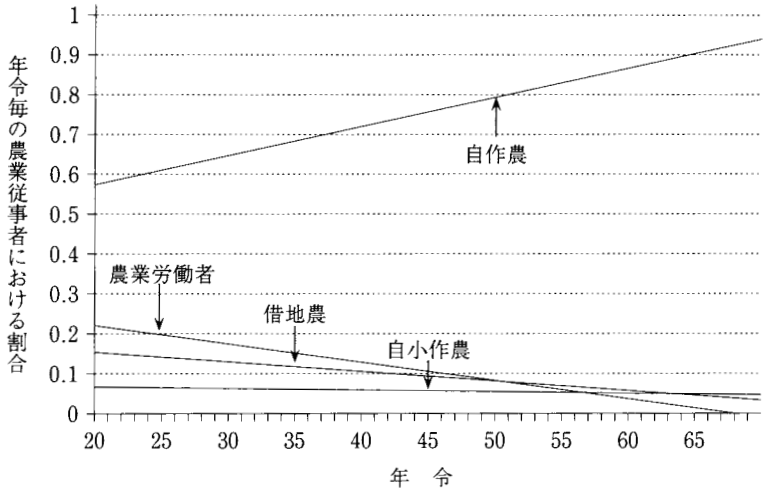
アタックは，「農業梯子仮説の中心的な命題は，個人のライフサイクルに重なりあう形での所有上の（あるいは経済的な）地位の移動に関するものである」[15] ととらえた上で，1859～60年のデータを加工して作成した図が，第1図，第2図である。これは，農場労働者，借地農，自小作農，自作農が全農業従事者を構成すると仮定して，各グループの年齢構成から各年齢毎のグループの相対的割合を逆に計算し図示したものであり，第1図は中西部，第2図は北東部についてのものである。両グラフとも年齢が上がるに連れて，労働者の割合が激減し，さらに借地農の割合も減少している。逆に自作農は年齢が上がるに連れてその割合を増大させる同じパターンを描いている。

この第1図から，25才，45才，65才だけを取り出して作表したものが次の第1表である。これらのことから，アタックは「農業梯子が想定していたように自作農は完全な所有権を獲得する前に農業労働者として農業に従事し始め，それから借地農，自小作農へと進むという，ライフサイクルに重なりあう上昇移動と一致する」[16] のだという。

さらに「大部分の農業梯子論に関わる研究は農業労働者を農業人口に含めな

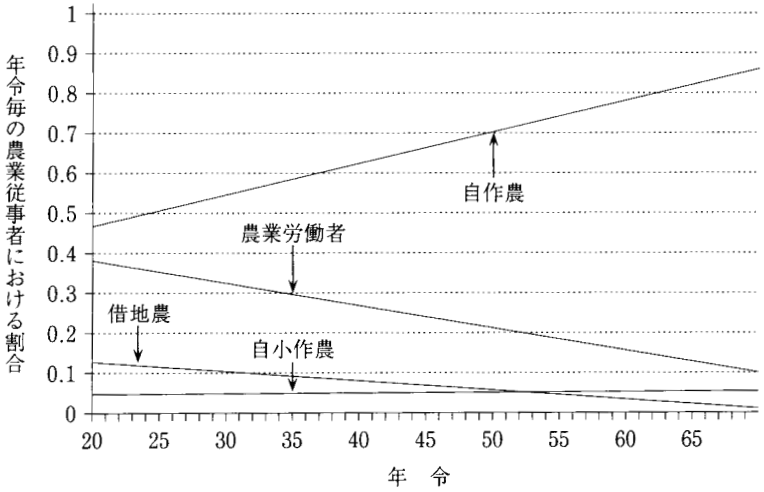
15）*Ibid.*, p.14.
16）*Ibid.*, p.15.
17）*Ibid.*, p.19.

第1図　中西部の「農業梯子」，1859—60年



出典）　Atack, *op. cit.*, p.17.

第2図　北東部の「農業梯子」，1859—60年



出典）　*Ibid.*, p.18.

いし，農業梯子の一部ともしていない」ので「他の研究との比較を可能にするために」[17]，先の1860年の北部のデータから農業労働者を除いて，農業従事者1000に対する借地農，自小作農，自作農の占める割合を示したものが第2表で

第1表

	労働者	借地農	自小作農	自作農
25才	195	140	60	605
45	103	92	52	753
65	12	44	43	901

第2表　合衆国北部の年齢グループ毎の借地農，自小作農，自作農の割合

年齢グループ	借地農	自小作農	自作農
20－24才	234	75	691
25－29	188	87	724
30－34	142	71	787
35－39	115	53	832
40－44	100	49	851
45－49	82	50	868
50－54	66	58	877
55－59	54	41	905
60－64	54	44	902
65－69	46	63	891

出典）*Ibid.*, p.19.

ある。

この農業労働者を除外した表は，年齢が上がるにしたがって借地農が減少し，自作農が増大するというパターンを第1表よりも一層際立たせて示すことになっている。

次に掲げる第3表は，各年齢グループ毎に農業従事者1000に対して借地農の占める割合について1850年から1930年の推移を示したものである。1860年の北部の数値は，ベイトマンとファウストによって提供された標本からアタック自身が計算したものであり，1850年の南部と1860年の南部の数値はウィンタースの研究からここに挿入したものである。さらに1890年から1930年までの数値はブラックとアレンが計算したものである[18]。

この第3表からアタックは，ある数値をその斜め右下のデータと比較しつつ，いづれの場合も借地農の割合が減じていることを指摘する。このことによって，年齢が上がるにしたがって，借地農が減少し自作農が増大するというライフサイクルを証明しようとするのである。たとえば，1890年に25才未満であったものは，1900年には25－34才の年齢グループになっているはずであり，1910年には35－44才の年齢グループになっているはずである。これらの数値を比較すれ

18）Winters, Donald L., "The Agricultural Ladder in Southern Agriculture: Tennessee, 1850-1870", *Agricultural History*, vol.61 (Summer 1987); Black, John D., and Allen, R.H., "The Growth of Farm Tenancy in the United States", *Quarterly Journal of Economics*, vol.51 (May 1937).

第3表　年齢グループ毎の借地農比率の推移，1850～1930年

	1860年 北部	1850年 南部	1860年 南部	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
25才未満	234	334	398	562	718	756	758	865
25－34才	162	247	289	421	543	550	565	670
35－44	108	160	170	301	353	373	397	463
45－54	74	123	132	230	290	268	302	346
55－64	54	117	68	167	207	211	207	247
65才以上	46	108	83	118	149	151	165	164

出典）*Ibid.*, p.19.

ば同じグループが年齢が上がるにしたがってそのグループの中の借地農の割合をどう変化させていくかを追跡することができるというわけである。1890年の25才未満の借地農の割合は562（農業従事者1000人に対して）であり，1900年の25－34才の年齢グループのそれは543，1910年の35－44才の年齢グループのそれは373であった。1890年の時に25才未満であった農業従事者のグループは，年を経るにしたがって徐々にあるいは急激にその借地農の割合を減少させていることがわかるし，これは1890年以降のそのほかの年齢グループについてもその数値の1段斜め右下の数値と比較すればわかるように概ねそういうことができる。

アタックは，「もし歴史が借地農への継続的な逆戻りと自作農への上昇移動の困難の増大の歴史であるならば，ある回のセンサスのある年齢グループのパーセンテイジは前の回のセンサスの一段若い年齢グループのそれより多くなるはず」[19] なのに，そうなっていないということから，このデータは農業梯子の逆戻りが支配的であったという仮説に一致しないのだという。

同じようにして，1860年の北部の数値および南部の数値と1890年のそれから3列下の，つまり30才上の年齢グループの数値と比較してみる。たとえば，1860年の25才未満の年齢グループの人々は1890年には45－54才の年齢グループになっているはずだからである。それによれば，アタックとウィンタースのデー

19）Atack, *op.cit.*, p.20.

タは1860年には25才未満の農民1000人のうち234から398の借地農がいたことを示唆している。これに対して1890年のこのグループ（つまり45－54才の年齢グループ）の借地農の割合は1000あたり230であり，30年のあいだに借地農の割合を減じていることを見いだすことができる。また，1900年の55－64才の年齢グループの場合は207，1910年の65才以上の年齢グループは151であるから，1860年の時点で25才未満であった人々は50年間に年を経るにしたがって借地農の割合を同じく減じている。

さらに1860年に25－34才や35－44才であった比較的年齢の高い二つのグループについては，このことがすべて完全にあてはまるわけではないが，概ね同じ傾向を示している。このことからアタックは「30年後の比較されるべき年齢グループの借地農の割合は，純移動がなかったという仮定のもとで予言されるものより高かったのはごく一部にすぎなかった。結論として，農業梯子の下降移動はあったかもしれないが，上昇移動によって水中に沈められてしまった」のだという。

この方法は「ある一地点の一定期間の年齢諸グループの経験は，変化しつつある環境の中である特定のグループが彼らの一生で経験するライフサイクル・パターンを述べているということ」を仮定しているのだが，この仮定はアタック本人が言うように「大胆な」仮定であるし，1850年と1860年の地域的なデータから1890年以降の全国的なデータと結合させて問題を論じるとき，それはもっと「大胆なもの」になる[20]。

ある特定の一時期の各年齢グループの農業従事者の割合からその地域での農民のライフサイクル・パターンを推定する方法は，ウィンタースによって先にとられたものであるが[21]，この方法は農業をめぐるさまざまな環境が数十年間にわたってあまり変化しなった地域，国あるいは時期ならまだしも，アメリカの，とりわけここで対象とされている19世紀後半から20世紀初めの時期のよう

20） *Ibid.*, pp.20-21.

21） Winters, Donald L., *Farmers without Farms－Agricultural Tenancy in Nineteenth-Century Iowa*, 1978.

に農業をめぐる状況が激変していた国あるいは時期には妥当なものとはいえない。ターナーの言葉を借りるまでもなく「絶えず前進するフロンティア線における原始状態への復帰」や「フロンティアで絶えず新規まき直しの状態ではじま」[22]っているような広大な地域を含んでいたのであって，そういう意味ではかなり構造の違う地域を内部に含んでいるところで全国平均で何ほどかのことをいうには自ずから限界があるし，慎重でなければならない。

また，この分析手法の問題点をもう一つあげるとすれば，各年齢グループごとの割合の比較であって絶対数が明かではないということである。ある年齢グループが年を経るにしたがってその借地農の割合を減じていることは，農業従事者全体の絶対数があまり変化していないのであればある一定の傾向を示すものとみることができるが，この時期のアメリカのように農業従事者の数も農場面積もきわめて大きな変動の中にあるときには，借地農の相対的割合の減少は直ちに借地農の絶対的減少を示すものではないし，さらにまたこの数値が借地農の自作農への上昇移動を証明するものでは決してないことはいうまでもないことである。

この表から結論できることは，むしろ従来から言われているように，年代が進むにつれて借地農から出発しなければならない若年層が急激に増大していることであろう。全国規模での1930年の25才未満の借地農の割合は1860年の南部（そこでは一般的にいって借地農の割合がもっとも高かった）の2倍以上であり，1860年の北部の4倍以上であった。この若い層での借地農の割合の増加は，時がたつにつれて上がる資本費用が若者にとってヨーマンのランクに入り込むことを妨げる障壁の増大となったという考えと一致しており，この主張は「楽観」論者にも「悲観」論者にも広く受け入れられてきたことはアタックも指摘するところである[23]。

ところがそれにもかかわらず，ここでもアタックは，借地農から出発するこ

22）Turner, Frederick Jackson, "The Significance of the Frontier in American History", in *Frontier in American History*, 1920 / 松本政治・嶋忠正共訳『アメリカ史における辺境』北星堂，1973年，7ページ。

23）Atack, *op.cit.*, pp.21-23.

とを余儀なくされた若年層が増大しても年齢が上がるにしたがって急速に借地農の割合が減少し65才以上層ではほぼ同じ割合に収斂する，つまり借地農――年齢直線の勾配が大きくなっていくことから，「なぜそうなるのかは明かではない」が「各年齢グループの借地農から自作農への進歩の割合は，時代が進むにつれて速くなってきた」と結論する[24]。

また「ライフサイクル・パターンは19世紀後半と20世紀前半の2，30年間の農業における土地所有上の，また社会的経済的な地位を理解する鍵」であり，「1850年から1930年までの時期をカヴァーして利用しうる証拠は，借地農から自作農への農業梯子の上昇移動に一致」するし，「これは，不運，経営能力の欠如あるいは不利な経済的条件による個人の下降移動の事例を否定するものではないが，このような状態は……長い期間持続もしなかった」という。

アタックは最後に「年毎に各年齢グループの借地農割合の上昇によってなされた悲観的な予言とは反対に，農業梯子はのちの時期には初期と同じほどかあるいはそれよりもむしろよく作用していたと思う」と結論的に述べてこの研究を締めくくっている。

Ⅳ.「自作農」神話と「農業梯子」論

以上，「農業梯子」論についてのアタックの研究について，その主要だと思われる点にしぼって私なりに整理して述べてきた。そのなかで，データの処理の仕方やその読み方など必要な限りでその都度問題点を指摘してきたが，ここであらためてアタックの研究について全体としてのコメントをしておこう。

ひとつは「いま何故『農業梯子』論なのか」という問題である。

「農業梯子」論は，アメリカ人のアイデンティティと直接かかわる極めてイデオロギッシュな性格をもともと持っていた。「農業梯子」論はジェファスンやクレヴクールたちのいわゆる「自作農」神話と表裏一体の関係にあった。ジェファスンは，『ヴァージニア覚書』のなかで次のように語る。「アメリカには

---

24) *Ibid.*, p.23.

農夫の勤労意欲をそそる広大な土地がある。……もし神に選民というものがあり，神が彼らの胸に本質的で純粋な徳を特別に授けるのであれば，大地で働くものこそ神の選民といえる。」「耕作する者の大多数が道徳的に退廃するなどということは，これまでいかなる時代にも，またいかなる国民にも聞いたためしがない。」「もう一度繰り返していうが，大地を耕す者がもっとも徳のある，独立心を持つ市民である」[25]，と。

さらに1840年に，ジェイムズ・B・ランマンは当時の有力誌『ハント・マーチャント・マガジン』誌において，「われわれが国家危急の時に国の諸制度を護持し，自己保全のためにも国家の諸原理を維持することを期待するのは，これら一国の誠実な自立自作農民である」[26] と述べている。

この文章のなかに，旧世界ヨーロッパの腐敗や貧困から脱してアメリカを真の新世界たらしめる道徳的・倫理的な主体としての「自営農民」という思想，アメリカ民主主義のバックボーンとしての「自営農民」という思想が表明されている。そしてその自営農民の自由な形成を日々保証するものとして「西部」がイメージされていた。H・N・スミスのいう「『農園』神話と不屈の『自作農』象徴」[27]であり，「自作農民から成るユートピア西部という幻想」[28]であった。

スミスは安全弁説のイデオロギッシュな性格とそれが一般に受容され続けたことについて次のように述べている。「だが安全弁説が大部分嘘であったとし

25）大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『史料が語るアメリカ』有斐閣，1989年，59～61ページ。

26）Smith, Henry Nash, *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*, Harvard University Press, 1950 / 永原誠訳『ヴァージンランド ── 象徴と神話の西部』研究社，1971年，176～177ページ。

27）同上書，208ページ。

28）同上書，177ページ。さらにスミスは「土地均分理論と南北戦後の現実の西部の状態との間の大きなギャップは，十九世紀最後の四半分に農民の諸運動となって現れる幻滅を生むのに，大きな役割を果たしたにちがいない」（239ページ）し，「イメージと事実，理想と実際，希望とその成就の間のこの対照の大きさが，一八七〇年代以降次第につよく人々にその存在を感知せしめることになった，農民の反逆のにがい怒りの大きさを規定している」（238ページ）のだという。

て，十九世紀にこの説がほとんどすべての人に受容れられていたことを，どう説明すればよいのか。フロンティア入植の諸事実のみを取上げると，これは答え難い問題である。しかし，もしわれわれが，この説は『世界の農園』神話の重要な一部であったのだということに気付けばこの信仰の遍在はもっと説明が容易になる」，と。彼はまた別の場所で「安全弁の教理は想像力の構築物」であったという。このスミスの指摘はきわめて示唆的である。この文章のなかの「安全弁」の代わりに「農業梯子」を入れてみられたい。そうしてもこの文章は十分な説得力を持って成立しうるのである。とはいえ，「安全弁」説に比較すれば「農業梯子」論の方がはるかに現実的根拠を持ってはいるのだが。

「農園神話」すなわち土地均分論の伝統の抽象的諸観念は，入植が進むにつれて，北西部の諸地方にも次々に適用されていった。そしてそれ「以後，北西部の社会思想を支配することになる自作農理想は，18世紀土地均分理論とアリゲーニーの向こうのアメリカの体験の観察との融合から生じた」[29] のである。

この文脈のなかで「農業梯子」論は，西部の地においてただちに自営農民になることができないとしても，すなわち最初は農業労働者あるいは借地農としての出発を余儀なくされたとしても，いずれは梯子を順調に上ることによって「アメリカ」を支える主体としての自営農民を広範に形成することができるということであった。したがって，「農業梯子」を上昇していくということが困難になることは，同時にアメリカのアイデンティティとアメリカ民主主義の危機でもあるという認識がその背景にはあった。

要するに，「農業梯子」論を肯定的に論ずるにしろ批判的に論ずるにしろ，またそれが文章の上に表現されるかどうかは別にして，「農業梯子」論はアメリカのアイデンティティとの関連でその時代が当面する課題と関わらせて，きわめて実践的に考察され論じられてきたといってよい。ビリントンは，先に引用した『フロンティアの遺産』のなかで自らの研究方法について，ターナーの「歴史の意義」という論文から「各時代は自分自身の時代に最も大切な条件に応じて過去の歴史を新しく書き直す」という文章を肯定的に引用している。そ

29）同上書，166ページ。

の上で，彼はこの書物は「(フロンティア) 仮説全体を再評価しようと試みるもの」であるが，「今日の歴史家に利用できる道具をもって，その有効性を大いに試して，この理論の有効性だけを扱うものである」[30] と述べている。

このような方法がいいか悪いかは別にして少なくともアメリカの歴史学はきわめて「実践的な」姿勢を持ってきたと思われるが，アタックの研究には，アメリカ民主主義との関連も，実践的問題関心をも感じることはできない。これは彼がとっている計量経済史的手法によるものだとは必ずしもいえない。それは，現代アメリカのアイデンティティの「分裂」あるいは「喪失」感の反映なのかもしれない。

V.抵当債務と「農業梯子」論

先にも少し触れたのであるが，アタックはこの研究をまとめあげる際に，当時の農民の状況を考える上で不可欠の要素を考慮していない。アタックが利用した資料，ベイトマンとファウストによって1860年センサスの原表から選択された標本は，抵当債務の有無についてのデータを含んでいない。しかし，自小作農であれ自作農であれ，彼らが抵当債務を負っていたのかいなかったのか，負っているとすればどのような形で負っていたのか，という問題は，当時の農民の経済的地位と状況を理解するためには不可欠の要素であるはずである。

たとえば，経済学的にいえば借地農と自小作農・自作農のあいだに一線が引かれるのではなくて，借地農 tenants，抵当債務を負っている自小作農 part-owners, mortgaged，抵当債務を負っている自作農 owner farmers, mortgaged の三者は，所有と経営との分離という視点からすれば基本的には同じ性格をもつものと評価されてきた[31]。事実，「農業梯子」論の楽観的な理解についての批判者たちは，この点を主要な根拠のひとつにしていた。したがって，

---

30) ビリントン，前掲書，iiページ。

31) 拙稿前掲論文「19世紀後半イリノイにおけるテナント・ファーミングの展開と鉄道供与地」を参照されたい。

この問題で再批判を試みるのであればやはり抵当債務の問題を射程にいれて問題を考察しなければならない。そういう意味では資料上の制約があったとはいえこのことはこの研究の致命的欠陥のひとつであるといえよう。

アメリカ，特に西部で繰り広げられた入植・「開発」・農業発展の全過程は，「無主地」における土地所有そのものの創造およびさらにその近代的土地所有への転化の同時併行的進行の過程であり，それこそ資本と土地所有をめぐる〈アメリカの特殊性〉であることについては，かつて論じたことがある[32]。ただここで「無主地」という場合，敢えて指摘するまでもないことだといわれるかもしれないが，先住民である「アメリカン・インディアン」を追い払い生活基盤を奪い，総じて彼らと土地との本源的な結びつきを断つことによってはじめて，ヨーロッパからの移住者・侵入者にとってアメリカの広大な土地が「無主地」として顕現したことを忘れてはならない。

このような文脈のなかで言えば，借地農の増大や自小作農・自作農両者における抵当債務の増大は，広大な「無主地」の存在が「諸個人による土地の直接的利用を閉め出すものとしての近代的土地所有」の形成を困難ならしめる特殊アメリカ的な状況のもとで，近代的土地所有が形成され深化していく具体的な過程だということができる。

ゲイツの研究は，アタックがいうように借地農の増大を「農業梯子」を「下降移動」したものだととらえていたのでは必ずしもなく，自作農になることの困難性の増大を指摘していたのである。ゲイツ自身明確に意識しているわけではないが，アメリカにおける近代的土地所有の形成の具体的実相について豊富なデータを提供していたのである。

Ⅵ. むすびにかえて

「人は現在より未来の方が良くなると信じてきた。」これは，先日行われたイスラエルとパレスチナ解放機構によるパレスチナ暫定自治宣言の調印式にお

32）同上，62ページ。

けるクリントン大統領の演説のなかの冒頭の一節である。何の変哲もないように思われるこの「思想」は実は近代社会に特有のものであるが，この想いはとりわけアメリカ人に強かったと言えよう。その背後にあったものは自営農神話であり，「農業梯子」論であった。そしてこれこそアメリカのアイデンティティを支えてきたいくつかの重要な柱の一つであった。

いまアメリカは「親の代より豊かになれない」時代をはじめて迎えたといわれる。アタックの研究はこのような時代のなかで「農業梯子」論を「再復活」させようとするものであったが，その試みは成功していない。

試みが成功していないだけではない。先に指摘したように，この研究に「歴史意識」を読みとることができなかったが，これはゆゆしき状況であるといえないだろうか。しかし翻ってわれわれはどうであろうか。われわれはこのような状況に無縁だとはたして確言できるだろうか。いま私は自戒の念を込めて，E・H・カーの『歴史とは何か』のよく知られている次の一節を読み直している。

「そこで『歴史とは何か』に対する私の最初の答を申し上げることにいたしましょう。歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり，現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります。」[33]

「事実はみずから語る，という言い慣わしがあります。もちろん，それは嘘です。事実というのは，歴史家が事実に呼びかけた時にだけ語るものなのです。いかなる事実に，また，いかなる順序，いかなる文脈で発言を許すかを決めるのは歴史家なのです。」[34]

33）Carr, E.H., *What is History?*, 1961, p.35 / 清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波書店，1962年，39～40ページ。

34）*Ibid.*, p.9. 同上，8ページ。